

「やっぱりこういうマンションもいいな。それにここは家具もきれいだし、家電もかなり新しい」

鵜月蒼真（うづきそうま）は、身の回り品を入れたスーツケース2つを床に置いて部屋を見回した。

家具家電備え付けのシンプルなウィークリーマンション。

今日から二週間、自宅の改装が終わるまで、ここが仮住まいの我が家だ。

蒼真が元々住んでいたのは叔母から相続した小さな戸建てなのだが、いかんせん古い家だった。

なので、最近給与も上がったこともあり、水回りを始め全体を大きくリフォームすることにしたのである。

こういう綺麗な集合住宅は住んだことがなく、憧れがあったから、短い期間とは言えここでの生活も楽しみだ。

適当に荷物を仕舞い、その日は早めに休むことにした。

……くちっ♡くちっ♡くちっ♡

深夜。

『それ』はベッドの端から布団の中へと入ってきた。長く伸びる白い糸のようなもの。

一本一本は細いそれが、束になって伸びて、ベッドに潜り込み、蒼真の足を這い、パジャマの裾から中へと入り込んでいる。

「ん、ん…」

もぞもぞ♡もぞもぞ♡…  
くちっ♡くちっ♡くちっ♡…

蔓のように伸びながら足の付け根まで巻きついて、くたりと萎えた性器にまとわりつき、また枝分かれしたものは胸元まで登ってもぞもぞと撫でまわした。

誰か第三者が見ていたら、服の下で触手めいた何かか蠢いて、全身の素肌にいやらしい悪戯をしているとわかるような大胆な動き。

「んっ、んっ…」

蒼真は目覚めず、火照った息を吐いて寝返りを打つ。

伸びた糸の出所を辿ると、それは、この部屋のクローゼットだった。

持ち込んだ上着と、空のスーツケースくらいしか入っていないはずの空間。観音開きの扉が少しだけ開いていて、そこから白い糸が束になって伸びている。

足の間に入り込んだ糸が、くち♡くち♡と汗ばんだ肉の奥をまさぐりだした。

さらに、細く振じられた束がつぶ…♡とその奥のすぼまりを通り、ずるずると胎内を登っていく。

「…ふ、あ…」

それらは意思があるようにバラバラに動き回った。

下半身は、陰茎に巻き付き、鈴口をくすぐり、陰嚢を揉み…胸元は、器用に乳首に巻き付いて締め付け、充血して硬くなったところを束になった毛先で刷毛のように弾いたり。

「あ…ああ…んんっ…♡」

無防備に眠ったまま、布団すら乱されることなく密かに肌や粘膜を犯され、寝言に甘い色が混ざる。

陰茎はゆるく勃起上がって、下着の中でいじくり回され、切なげに雫を漏らした。

その尿道に、極細い毛束が、先走りを吸いながら潜り込む。

本来であれば異物に痛みを感じる狭い場所だが、細くやわらかな糸のため、目を覚ますには至らない。

「んんっ…♡」

ヒクン♡

目覚めることのないまま、仰け反って甘く絶頂した。

「なんか変な夢見たな…」

翌朝、蒼真は首をかしげながら出勤の支度をした。

部屋が変わった初日は眠れないかと思ったが、手続きなどで疲れていたのか、昨夜はすぐに眠ってしまった。

だが、変な夢を見たせいで、いまいち疲れがとれていない気がする。

夢の内容ははっきりとは思い出せないが、小さな生き物になって蜘蛛の巣に囚われる夢だった気がする。

驚いてもがいていたら、何かが頭上に現れた。

自分の二倍くらいの大きさの『何か』は、人のような形をしているが、どう見ても人ではなかった。長く白い髪をしていて、猫背気味に自分をのぞき込んでいる。

『お前…何…？』

そう尋ねたところで目が覚めたのだった。

そわそわ、ゾクゾク。

出勤しても、なんだか体が火照って重く、悪寒のようなものがして仕事に集中できない。

これはいよいよ風邪か…と暗澹たる気持ちになった。寝不足や環境の変化が思ったよりストレスなのかもしれない。

(はあ、よりによってこんな時に…)

弱っているととたんに慣れない住処を心細く感じる。楽しみだった期間限定のマンション生活なのに。その日はなかなか仕事に集中できなかった。

「鵜月、体調悪そうだな。大丈夫か？」

「ああ、ちょっとリフォームでバタバタしてたからかもな。今日は早く帰って寝るよ」

「今はウィークリーマンションにいるんだっけ。慣れないところだと落ち着かないだろ」

「綺麗な部屋だし住み心地は良さそうなんだけどな」

「まああと…そういう人の出入りが多い部屋はな～何かいるのかもしれないぜ？」

「はあ？やめろよ、子供じゃあるまいし」

同僚の無責任な物言いに、ムツとする。

「冗談だよ。でも靈感強いやつは、変な部屋に住むと体調悪くなるって言うからさ」

「馬鹿言っていないで仕事しろ、俺は早く帰るんだから手伝わないぞ」

ごめんとヘラヘラ笑って謝る同僚を無視して席に戻る。

お互い二十代も半ばを過ぎてるのに、あいつはまだ学生気分なのかとため息を吐いた。

ギシ、と椅子に座り、相変わらず火照る顔を軽く叩く。

よし、とPCに向かおうとしたとき…ぞくぞくっと一際強い悪寒が腹から駆け上ってきた。

「…っ…ん、うっ…!？」

変な声が漏れそうになるのを耐え、ふうふうと息をついた。

しばらく耐えていると、ゆっくりと落ち着く。なんなんだ、と毒づいた。

定時を過ぎると、すぐに帰宅した。幸いあれから体調は悪くない。これなら明日は大丈夫そうだと安堵する。

風呂に入り、早めに寝ることにした。

「う…んう…」

その夜。また変な夢を見た。

何かから必死で走って逃げるといふ、悪夢の定番のような夢だ。

地面から生えてきた長い草が足に絡みつき、転んでしまう。

逃げていた何かに追いつかれ、背後から押しかけられる。

(く、食われる…っ！)

自分の二倍は身長のある化け物に捕まって、後ろから覆いかぶさられる。

重みで振り向くこともできないでいると、背後のそれは蒼真に体重をかけて、ぐっ、ぐっと大きな体を揺らし始めた。

地面との間に挟まれた自分も揺すられ、その度に呻いてしまう。

(えっ！？こ、これ、なんだか…っ)

その、重たく力強い前後運動のリズムは、なんだか性行為を連想させる。

淫夢というにはホラーだが、巨大な化け物に襲われているのに、食われたり殺されたりではなくただのしかかられて揺さぶられるだけ、という奇妙な夢

だった。

「うう…くそ…何て酷い夢を見たんだ…欲求不満か…？」

朝、目覚めてげっそりと呻いた。そういえば最近、忙しくて自慰もしていない気がする。

おそらく、溜まっていたところに、あの同僚のホラー話が融合して、こんなおかしな夢になったのだろう。

出勤したら同僚に文句を言ってやる。と思ったが、お前の話のせいで怖い夢を見たなどと言うのはさすがに子供っぽい。しかも夢の内容は、微妙に淫靡なものなのだ。

せめて仕事を押し付けてやろう。

「…鵜月、お前昨日よりさらに顔色悪いけど大丈夫か…？」

「別に、ただの寝不足だよ、ほっとけ」

「あまり酷いなら病院行けよ？それかお祓いか…」

「お前、まだ言うかそれ？」

いざ出勤したら本気で労わられてしまい、気まづくなる。

仕事を押し付けるところか、むしろ率先して手伝って貰ってしまった。悪いやつではないのだ。少しデリカシーがないだけで。

(疲れたな。でも明日からせっかくの三連休だし、今夜は少し飲むか…)

病院に行けと言われたが、単に何となく怠かったり、ときどき悪寒がするというだけなのだ。それもすぐ治まる。

どうせ原因は、環境の変化のストレスとか、夢見が悪いせいの寝不足だろう。

それに明日は土曜だ。たいがい病院は午前だけやっていて、バカみたいに混んでいるものだ。たかだか風邪薬と睡眠剤を貰うためだけに半日つぶすよりは、心と身体を休めて、疲れを取りたい。

夜、動画を見ながら何本かビールを飲んだ。久しぶりの休みだと思うと、ようやく気分も軽くなってくる。

思えばこのところ、休みは全部業者との打ち合わせや片付けなどで完全につぶれていたのだ。そりゃ体調も崩すだろう。

久しぶりに良い気持ちで、床のラグに横になって、

うたた寝をしてしまった。

……くちっ♡くちっ♡くちっ♡

くちくちくちくち♡くちゅくちゅくちゅくちゅ♡

さわさわさわさわ…♡

くりっ♡くりっ♡くりっ♡くりっ♡

「ん、んんっ…？」

ふと、むず痒さを感じて目を覚ました。

なんだか、手足が重い。何かが絡みついているみたいだ。

それに全身が痒い。肌を、何か柔らかいものに、擦られているかのような感触。

「！？」

目を見開いた。

手足に、白くて細い糸のようなものの束がたくさん巻きついている。

しかもそれらは服の下まで入り込んで、性器や乳首にまで絡みついているようだ。

「な！！なんだこれっ…！？あっ、うあっ！？！？」

振り払おうとした瞬間、バチン！と頭が真っ白になった。

ずりゅんっっ！と細いものに、陰茎の先から尿道の奥に勢いよく入り込まれたのだ。

寝起きに突然尿道を犯される、そのとてつもない衝撃に、ガクガク震えながら喘ぐことしかできない。

「ひあッ！？！？あーっ！なに！？」

そのままその何かはずりゅずりゅ♡ごりゅごりゅ♡と尿道内を刺激しながら逆流していく。

未知の感触に身を振るが、全身に巻き付いた糸は大量かつ強靱で、切れるどころかどンドン絡みついでくる。

(や、やばいっ！なんか、ちんこの奥まで入ってる！？生き物！？！？)

「やめ、やめろっ！入るなっ！入るとこじゃないからあっ！？」

引き抜こうとして伸ばした手が、ぎゅっと糸に縛

られて拘束される。

さらに足首も囚われ、部屋着のスウェットを下着ごと引きずり下ろされて、ぱかりと左右に開かされてしまった。

新たな糸の束がずるずると増えて、露わになった尻の間に潜り込んでゆく。

「アッ、やめろ、なに、どこ入って…おッっっ!?!?!」

まるで意志を持っているかのようなそれは、どんどん束を太く増やしながらかん門に入り込むと、前立腺を探り当て。

尿道から奥へと進んだ糸の束とで、前立腺をぎゅんっっ♡♡と潰すほどの力で挟みこんだ。

ギュッ♡ぎちゅっ♡ぐにぐにっ♡もみっ♡もみっ♡もみっ♡もみっ♡

「おっ♡! おあっ♡! やだっ♡! ひぎっ♡!?!」

じゅぽっ♡ぎっちゅ♡ぎっちゅ♡ぎっちゅ♡ぎっちゅ♡ぎっちゅ♡ぎっちゅ♡

「あえっ♡！！やだやだア♡！！やえろっ♡！！つぶれ、つぶれりゅうっ♡！！」

本来なら触れることも稀なはずの前立腺を前後からみちみちに挟まれ、潰されながら捻られ。普通に生きてたらあり得ない刺激に身悶えていたら、今度は乳首をギュッとつねられた。

「んいっ♡！？！？」

細い糸でぎぢっ♡と限界まで強く縛られてから、毛束の先で優しくしゅりしゅり♡と撫でられ、それを何度も繰り返される。

ぐりっ♡ぎぢっ♡…こすこす♡さりっさりっ♡…  
ギリッ♡ギチッ♡…すりすり♡さわさわ♡…

「あ〜っ♡！うんっ♡！ああっ♡！」

頭を振って暴れても逃しきれない痛みと快感が暴れ回る。

さらに睾丸も痛いほど強く揉まれ、カリ首と裏筋を硬く尖らせた毛先でザリ〜っ♡ザリ〜っ♡と磨かれ、蒼真は仰け反ったり丸まったり狂ったように床

をのたうちまわった。

「もうむりいっ♡いぐうッ♡いぐいぐいぐ〜〜〜ッ♡！」

涙と鼻水で顔面をぐちゃぐちゃにし、足をつま先までピンッと伸ばして泣き喚いた瞬間、見計らったように尿道からずるるるんッッッ♡♡！！と糸の束が抜き出された。

びゅるるるるるッ♡♡♡！！  
ぶしゅっ♡ぶしゃっ♡

盛大に射精し、それだけでは止まらず潮まで噴く。

「あ〜っ…♡あ、へあ♡…ッ？」

訳が分からないまま上り詰めさせられた、この世のものとは思えない絶頂に、蒼真は半分白目を剥き、舌を出してアクメ顔を晒してしまった。

だが、尻の中の一番太い束は出ていかず、ビクンビクン♡と余韻で痙攣する雄膺をいっぱい埋めたまま、更に奥に進んでいく。

「ひっ！？も、もうやらあ…！」

自分に何が起きているのかわからない恐怖と快感に、みっともなく泣きじゃくりながら、床を這って少しでも逃れようとした。

だが、大量の白い糸はどこまでも伸びて逃げられないどころか、どんどん増えてゆく。

ずちゅっ♡ずにゅっ♡ずりゅっ♡

直腸の奥へ奥へと入っていった毛の束は、その行き止まりに溜まり、モゾモゾと結腸を搔き分けるように刺激し始めた。

同時に前立腺も、大きな結び目のような瘤を作って、それがごりゅっ♡ごりゅっ♡と行き来する。

「おっ♡♡！オ、ダメえッ♡そこだめえっ♡！」

結腸はいくつもの細い束が、カリカリ♡くりくり♡と四方にこじ開けるように引っ搔き。

前立腺は三つに増えた瘤がゴリュリュリユッ♡ゴリュリュリユッ♡と連続で押し擦る。

「あえっ♡！い、いぐっ♡！？またいぐう♡！」

四つん這いで床に縋りながら、雌犬のように尻を

上げて絶頂した。

びゅるるるっ、ぷしゃあっ♡

足の上に控えめな射精と潮を噴き、ガクガク崩れ落ちる。

「も、もお、むりい♡狂う♡おかしくなる♡誰か、だれか、たすけてえ…っ♡」

そうだ、外に、部屋の外に逃げれば。

暴力的な快感から逃れたい一心で、玄関に向かって短い廊下をずりずりと這う。

その途端、その何かはまるで蒼真の意図に気付いたように、ぎゅるんっ！と全身を引きずり戻した。

「ひいいっ！？！？！？やだやだやだーっ！！！」

室内へ、そして…大量の白い糸、いや、何かの白い毛の、出てきている大元…クローゼットの中に、引きずり込まれていく。

つまり、そこに、これの本体のような『何か』がいる、ということだ。

その恐ろしい事実気づき、蒼真は全身の血の気が引いた。

「だ、誰かっ！！？うわっ！！い、いやだっ！！」

ラグやローテーブルの足、床などなんでもいいから爪を立てて掴まって、必死に抵抗するが、凄まじい力と全身に巻き付いた毛に容赦なく引き寄せられてゆく。

それはまさに怪物の巣穴に引きずり込まれる獲物だった。

バタン！

一畳ほどのクローゼットが蒼真を飲み込み、扉が閉まる。真っ暗になった。

「ひっ、ひいっ……！」

ガタガタと震えた。

首筋に獣のような吐息を感じる。

背後に、何かすごく大きなものがある。そして、やはり、この大量の白い糸はそいつの髪か、体毛なのだ。

震えながらふーふーと息をしていたら、肛門を犯していた髪がずるるる…っとゆっくり引き出された。

「はあっ…はひっ…」

次の瞬間。

ずっっっごんッッッ♡♡!!!

「っっっおっっっ……………!!!？」

硬くて熱くて巨大な肉の棒が奥まで一気に挿入された。

子供の腕ほどもあるそれは、どう見ても人間の男性器の大きさではない。

太くて長く、とてつもなく深くまで押し込まれたのに、杭はまだ腿の近くにまで続きがあるのを感じる。

「おッ…!!お、オ…ッ…!!」

ずるるっ、どちゅっ♡!!ずるるっ、どちゅっ♡!!

わけもわからぬまま始まる、ストロークの長過ぎる人外ピストン。

一撃一撃が重すぎる挿入に、内臓を殴られてえず

く。突き上げられるたびに足が浮く。

なのに、背後の化け物はさらに奥を開こうとするように、拘束した蒼真の体を引き寄せながらぎちぎちと奥へ押し込んで、また突き上げるのを繰り返す。

ずるるっ、どちゅっ♡！！ずるるっ、どちゅっ♡！！

ぐぐぐぐっ…♡！ぎちっ…♡！

「おごッ、おオッッ」

ずるるっ♡どちゅんっ♡！！ずるるっ♡どちゅんっ♡！！

ギチっ…♡ギチっ…♡

「うぐ、オッ…む、むりだっ、もう、入らないっ！」

ぎちゅうっ…♡

一際強く奥を押し上げられ、ずっと毛先でこじ開けようとしていた結腸に先端を押し付けると、ビク、と腹の奥の熱杭が跳ねた。

ビクビクッ♡